

楊 夢 (ヨウ ユメ)

中国出身

日本女子大学 家政学研究科児童学専攻 修士課程

1. 遅れている自分

故郷の親友は、「結婚式に来てください!」と、幸せいっぱいな口調で結婚のことを話してくれました。「きっと幸せになって、素敵な未来を迎える。」私は心から喜んでいるが、少し、寂しい気持ちもありました。彼女だけではなく、去年の一年間、何人かの友だちから結婚のことを知らされて、子供を産んだ友人もいました。高校や大学の友だちの中に、進学した子も、就職した子も、今は大体立派な大人になって、自分の力で生きて、素敵な人生を歩んでいます。しかし私の場合は、大学卒業して、日本に来た2年後、やっと大学院に入って、今も、まだ学生のままで、家族や社会のために、何も貢献していなかったのです。学校でも、入学したばかりの時期で、同期のみんなは、職歴を持っていたり、面白い専門の経験があったり、早々と研究の本番に入りましたが、私は逆に、言語はもちろん、ほかの学科からこの専攻に入ったため、学術でも学べるものがたくさんあったので、研究はなかなか進んでいなくて、「なぜか、研究も人生も、私は周囲の人より遅れている。」と、私は困惑を感じて、悲しく、寂しく思った時期もありました。そんな私は、不慣れが増えてしまい、いろいろと助けを求め始めました。

2. 「一人の戦い」と助けてくる人たち

研究に対する不安を、ゼミの時に率直に話した

ら、博士の先輩から「研究は一人の戦いよ」というカッコいい一言をもらいました。先輩は、みんなの経験や課題が様々異なるので、自分のペースで進めばいいと教えました。あの時、私は一知半解で、「とりあえず自分の研究に集中しよう」と受け止めて、あまり深くは考えなかったのだが、修士論文を書いていた最近、ときどきこの“名言”を思い出して、「一人の戦い」の意味を少し理解してきました。

修士2年生になり、授業の時間がだいぶ減って、研究の本番に入りました。コロナの影響でなかなか通学して同期と一緒に討論しながら進めず、慌てて一人でアンケートの編成に着手し、調査に入りました。「あれ、この部分はこんなはずじゃない!」「この結果は問題あるのではないか?」と、いろいろと悩んで、こんなまとまりのない結果を先生に見せるとさすがに恥ずかしい、まず手本が欲しいという思いが強く、いろいろ資料を読んだり、学校の友人と相談したりしましたが、当時先輩が言ったように、みんなの課題がそれぞれ違う分野で展開していたので、専門的な指摘をもらえませんでした。しかし、多くの友だちや学校の先輩たちから、「大丈夫、ちゃんと結果を出しているから、自信をもって先生に相談していいよ」「早い段階で問題発見したほうがいいよ、まず先生に聞いて」など、励ましてくれました。思い切って指導先生に現段階の結果を見せところ、意外と、大きい問題が出ていませんでした。先生のアドバイスを

聞いて、自分の研究に対してさらにはっきりして、理解も深まりました。「楊さんはどんな結果を求めているのですか?」「楊さんにとって、このような解釈は納得できるか?」先生は、常に私の考えを大切にしつつ、私の選んだ道をはっきりさせる作業をしています。私の悩みに対しても、断言のような結論を教えるのではなく、私にとって最適な考案と一緒に探し出してくれました。こうしたいろいろの助けの中で、私の研究は前に向かって進んでいます。そしてもちろん、その助けの中に、坂口財団の方々の熱意もあります。経済面の支援は無論、コロナ禍の中で、ときどき孤立を感じた私にとって、一緒に歌舞伎を観たり話し合ったり、ZOOM で自分の課題や考えについて交流することは、とても貴重な経験であり、学校一家という単調の日常生活に豊富な色彩を付けました。さらに、毎月の一回の近況報告で、勝手に自分が抱えている悩みや不安なことを書き込みましたが、一件一件、アドバイスや経験に対する感想など、丁寧なご返事をいただき、いつでもあたたかく私を支えてくれます。私の専攻分野で、アタッチメント(他者への持続的な情緒的結びつき)という概念を重視し、このずっと支えてくれる信念は、まさに私と財団の間のアタッチメント!

いろいろな支援の中で、修士論文を完成しました。論文を書いている私は、だんだん「一人の戦い」の意味をわかってきました。研究も人生も、決して比較して参照できる手本がなく、自分で道を選び、一人で歩けなければならないが、時に、困難があっても、先をはっきり見られないときに、たくさん援助も存在しています。このように、支えたり支えられたり、そして各自の道を歩むのは、人生なのだ!

3. 将来の道

私は最初、ニュースで 12 歳の子どもの母親を殺した事件を読んで、その親子間に何か問題があるだろうか、もし早期にその問題の芽を発見して対応したら、こんな悲惨な結果に至らないだろうかという素朴な考えをきっかけで、犯罪心理学の分野に入り、研究を始めました。そして修士の段階で、子どもが問題行動を行う原因についていろいろ探して、そこから、親の養育の作用が明らかになりました。一部の疑惑は解けましたが、子どもはどうして犯罪に走るか、どうすればその犯行行為をはじめから止められるか、影響因子としての親子関係、友人関係、学校の作用、環境の影響など、まだまだ、探索したいことがいっぱいありますので、私は博士課程の進学を決め、博士の段階で解明しようと思い、今は入学試験のため頑張っています。犯罪の原因や幼少期からの影響因子を解明したら、将来に向かい、子どもの養育や教育には、何か少しでもできるものがあるでしょう、子どもの支援や養育、教育の支援、犯罪防止の事業に力を入れたいと思います。また、私が持っている知識を多くの関心者に伝えたいと考え、長期的には、研究者、教育者を目指しています。そのため、知識の累積はもちろん、たくさんなことを経験して、いろいろな人と出会い、恩恵を受けるだけではなく、いずれ学校の先生、財団の方々のように、いつでも援助の手を出せる、より良い社会、生活環境の推進に役に立てる立派な大人(今も大人ですが)になれるように一生懸命頑張ります。

以上